

2019年を境に、衰退が見られる。

加賀海岸のタイトゴメ (石川県加賀市加賀海岸)

タイトゴメの和名は、中国から伝わった「大唐米」の意味である。葉の形状が、小さく赤味を帯びた大唐米に似る事による。江戸時代には赤米と呼ばれて、下等品扱いであったという。

黄色い星状の花を付ける、ベンケイソウ科マンネングサ属の植物は、どれもよく似ていて、同定が難しい。特に、海岸の岩場等に咲くこのタイトゴメとメノマンネングサはよく似ている他、変異が多いので、同定は諦めて、長い間見て見ぬ振りをしてきた。

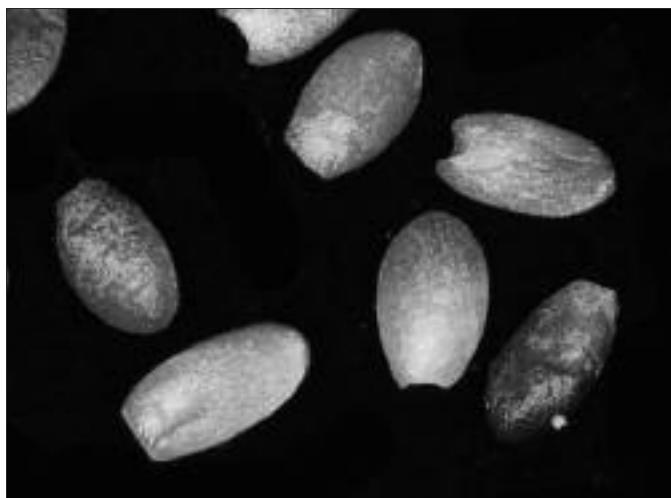
2019年、近くの加賀海岸の岩場で見事な群生を発見した。流石に、見て見ぬ振りができなくなって、同定をすることとなったのである。しかし、専門家に伺うが、なかなか見えてこない。

平凡社の「日本の野生植物」によれば、メノマンネングサ、タイトゴメ・・・は(中略)、すべて同一種内の亜種及び変種と考えられる。との記述により、両者は形質的にはほぼ同じで、葉の形状に違いがあると判

断して、例の岩場の葉を手にとって見てみることとした。すると、触っただけで丸い葉がポロポロ落ちるではないか。そして、落ちた葉を見て確信したのである。正に大唐米そのものであった。

余談ではあるが、同じ加賀海岸には7月に咲くメノマンネングサと思われる小さく弱々しい植物がある。ところが、福井県三国町の雄島、常神半島では5月下旬に咲くメノマンネングサがある。こちらは植物体が大きくしっかりしている。形質的には違いが見えないが、明らかに違う植物。マンネングサ属の植物は、まだまだ研究が必要な分野だと実感した。

翌年の2020年、気になって同じ時期に岩場を訪れてみると、黄色い花が激減していた。他のマンネングサは毎年同程度密に花を付け、年による変化がない。株そのものは減ってはいないが、どうしたものか。自然界は、気が付かないうちに、静かに変化が起きているのは間違いないようだ。



タイトゴメの葉。小さく赤い。手で触るとポロポロ落ちて、まるで米粒。名前の由来。



2019年の群生風景



2020年の風景。明らかに花数が激減している。